NEWS

附属校のニュース

立命館中学校・高等学校

2016年11月15日～11月19日

SGH Rits Super Global Forum（RSGF）2016が開幕

2016年11月、第3回Rits Super Global Forum（RSGF）2016を実施しました。世界9か国・地域から10校の生徒60名と立命館高等学校の高校2、3年GLコース・高校1年GJ選抜メンバーからなる78名、立命館大学の留学中の大学生（院生）TA約20名、そしてポスターセッション発表をはじめとして共同参加するGJクラス約60名を中心に総勢約250名という過去最大規模での実施となりました。

立命館守山中学校・高等学校

2016年12月10日

バトントワリング部　全国大会金賞受賞

12月10日（土）に幕張メッセで開催されました第44回バトントワリング全国大会で、高校バトントワリング部が3年連続となる金賞を受賞しました。

立命館小学校

2016年12月26日

立命館小学校で人型ロボット Pepperくんが活躍

学校法人立命館はソフトバンクグループ株式会社と「Pepper社会貢献プログラム」で活用するプログラミング教材を共同で開発する包括連携協定を12月26日（月）に締結しています。現在、立命館小学校には8台の人型ロボットPepperくんがいます。朝、登校した児童が「Pepperくんおはよう！」とあいさつをして教室に入り、中休み・昼休み・放課後には、ゲーム・クイズ・ダンスなどでPepperくんと交流しています。児童たちは自ら考えたクイズをPepperくんに出題、友達のようにPepperくんと接しています。

立命館宇治中学校・高等学校

2017年2月23日

第４回日経「星新一賞」※で 上西那智さんがグランプリ受賞

第４回日経「星新一賞」（日本経済新聞社主催）の選考会において、中学校3年生の上西那智さんの「ボクのしょうかい。」がジュニア部門グランプリに選ばれました。

「星新一賞」は、日本のSF小説を牽引した故・星新一の功績を称え、理系的な発想力を問う短編文学賞として創設されたものです。今回は、作家の恩田陸さんら6人が審査員となり、上西さんが応募総数2572編の中からジュニア部門の頂点に選ばれました。また中学校3年生の李宰佑くんの「ペンと人生のジャンル」が優秀賞に選ばれました。

※日本経済新聞社主催

立命館慶祥中学校・高等学校

2017年5月3日

高等学校弁論大会で 松山泰斗くんが優勝

5月3日（水）に開催されました、内閣総理大臣賞、文部科学大臣賞、椎尾弁匡記念杯第71回全国高等学校弁論大会において、高校弁論研究部3年、松山泰斗くんが優勝し、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・椎尾弁匡記念杯の3つの賞を受賞しました。

BOOKS FOR BOOKS ～立命館の本活～

読み終えた本の買取額を寄付金として活用し、新しい図書の購入に役立てる古本募金活動を2013年度より実施しています。

実績　203,151冊（3,791,411円）　3,994名
2013年4月～2017年7月末

［活動事例］

年度	場所	活用内容
2013年10月	立命館小学校	1～6年生の必読書（43冊）
2014年8月	立命館大学	〈衣笠・BKC図書館〉英語多読本・日本語学習教材（307冊）
2015年2月	立命館小学校	児童たちからリクエストを募って選定した図書（34冊）
2017年3月	立命館大学	OIC図書館に学生アンケートを募り選定した図書（470冊）

なお、購入された本には、「古本募金により集まった寄付で購入した」ことが分かるシールを貼付しており、手に取った学生・生徒・児童たちに、ご支援いただいた方々の想いが少しでも届いてほしいという願いを込めています。

学校法人立命館 総務部 寄付事務局
〒604-8520 京都市中京区西ノ京朱雀町1番地
TEL 075-813-8110　FAX 075-813-8119　E-mail　rgiving@st.ritsumei.ac.jp

RITSUMEIKAN

ご寄付のお礼とご報告

Donors Newsletter 2017

立命館

2018年4月

立命館大学に新たな学部・学科を新設!!

ごあいさつ

平素は立命館学園の教育研究に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。
立命館は、皆様のご期待にお応えできる学園であり続けるために、
児童・生徒・学生が新しい価値を創造できる人材に成長するための土台を提供し続けていきます。
また国際的通用性のある世界水準の教育と、特色ある研究拠点の創造に努め、日本・アジアそして世界の未来をつくる
「立命館らしい」児童・生徒・学生を育てることで、教育機関としての役割を果たしてまいります。
今後とも温かいご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

学校法人立命館　理事長　森島 朋三

N E W　S T R A T E G Y　O F　R I T S U M E I K A N

新学科　アメリカン大学・立命館大学 国際連携学科

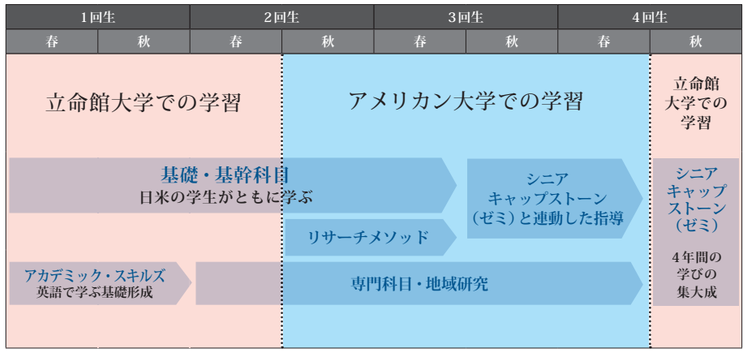
日本初! 学部間ジョイント・ディグリー・プログラムを2018年スタート

「学部」初、「文社系」初、「私学」初、「日+米」初

1988年、西日本で初めて本格的な国際関係学部を設置し、国内での教育・研究の国際化をリードしてきました。学部開設30周年を迎える2018年4月に、教育を国際水準に高めるべく、これまで20年以上にわたって連携を進めてきたアメリカン大学と、日本で初めてとなる学部間のジョイント・ディグリー・プログラム「アメリカン大学・立命館大学国際連携学科」を設置いたします。ジョイント・ディグリー・プログラムは、双方の大学が共同で一つの学位プログラムを運営するため、十分にコーディネートされた体系的なカリキュラムでの学びが特徴です。

アメリカン大学

● 4年間の学習イメージ（学修言語は4年間　英語）

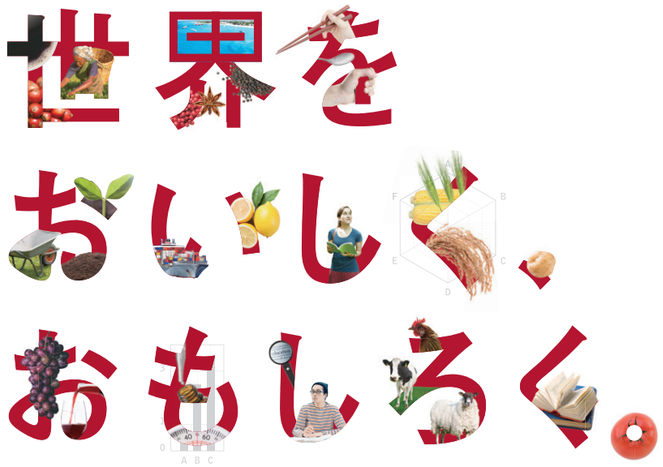


学位名称「学士（グローバル国際関係学）」

アメリカン大学の概要

1893年に開学した伝統的な大学です。ワシントンD.C.に立地することから、ケネディ元大統領やオバマ前大統領など歴代大統領が演説を行ったことでも有名な大学です。ジョイント・ディグリー・プログラムのパートナーとなるSchool of International Services（SIS）は1958年に設置され、米国の雑誌「Foreign Policy」の国際関係学分野ランキングで全米第9位となっています。

新学部　2018年 開設 食マネジメント学部



いただきます。ごちそうさま。
人類が誕生して以来、何千万回、何億回と繰り返されてきた
「食」のあり方が、いま大きく変わろうとしています。
食のおいしさを、科学的に解き明かす人。
食をキッカケに、新たなビジネスを生み出す人。
食のチカラで、社会を幸せにする方法を考える人。
人は、食を通じて、世の中のあらゆる問いに
答えを求めようとしています。
人が生きる上で、なくてはならないものだからこそ
世界を大きく変える可能性を秘めています。
「世界をおいしく、おもしろく。」
食で、世界を変えていく。
誰も経験したことのない学びが、はじまります。

特徴1　「食」を通じた、総合的・多面的な学び

食は人類の存在の根本に関わり、国境、信条、歴史、言語などを越えたものです。その研究の対象は、経済学、経営学、社会学、歴史学、地理学、認知科学といった複数の学問分野に渡ります。

特徴2　外国語教育とグローバルに広がる学び

英語と第2外国語（イタリア語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語、朝鮮語のいずれか）を全員が履修し、グローバル社会で活躍するためのコミュニケーションの能力を磨き、多様な視野の獲得と多様性への理解を育みます。

特徴3　実社会と通じたアクティブな学び

社会が抱える課題や自分が挑戦したいテーマを決めて実行する、課題発見・解決型のプロジェクト学習を行います。企業や団体など様々な組織と連携しながら実際のニーズを踏まえた課題に取り組むことで、実践力を高めます。

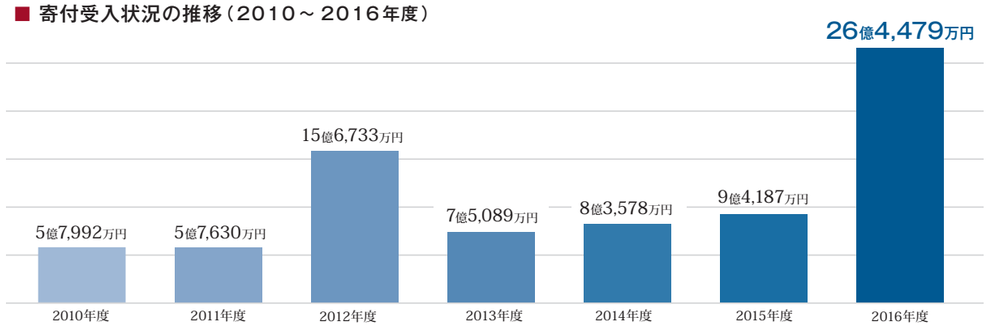
REPORT

2016年度 実績報告

2016年度に皆様からいただきましたご支援についてご報告させていただきます。
昨年度は総額26.4億円の温かいご支援を頂戴しました。

寄付金額の推移

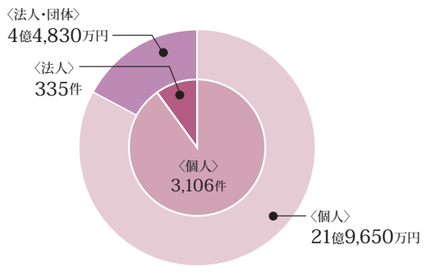
■ 寄付受入状況の推移（2010～2016年度）



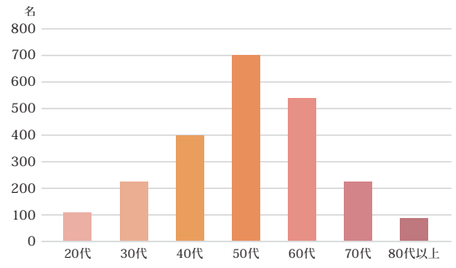
※2016年度は新図書館建設にあたり高額の寄付をいただきました。

2016年度 寄付受入状況

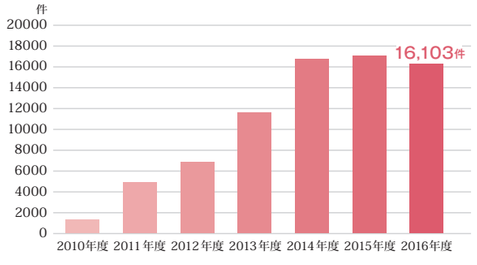
■ 寄付者数と金額の内訳



■ 寄付者の年齢分布（立命館大学）

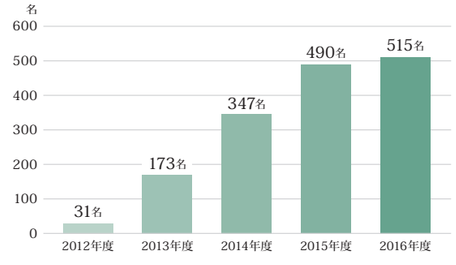


■ 個人寄付の広がり



※個人寄付の延べ件数

■ 継続的な寄付の広がり



※クレジットカード・口座振替による継続寄付

APPROACH

校友会未来人財育成基金での取り組み

校友一人ひとりの「未来の立命館は私が創る」という想いを繋ぎ、校友の支援で後輩が育ち、
後輩の成長が母校を発展させるという広く・長い支援のサイクルを生み出したい。
そのような考えから始められた立命館大学校友会が主導する後輩・母校支援のかたちです。

実績
142,494,164円
3,220名（全19,125件）
● 2012年10月～2017年8月末
※法人・団体を含む

＋R校友会未来人財育成奨学金　2017年 校友会未来人財育成基金からふたつの奨学金が生まれました

海外留学支援

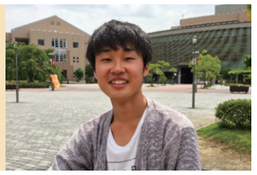
まだ語学力が充分でないために留学に踏み出せない学生でも、国際的な視野を身に付けられるよう海外の大学へと派遣する「Global Fieldwork Project」。このプログラムへの参加費の約半額を支給することで、海外留学への第一歩を後押しします。

成長支援

2015年度より校友会からも支援を行なってきた＋R個人奨励奨学金。学生の自主的な学びを支えてきたこの制度がさらにパワーアップし、校友会が全面的にバックアップする奨学金へと生まれ変わりました。活動に必要な経費を支給することで、社会貢献に取り組む後輩を応援します。

Global Fieldwork Project 採用者インタビュー

五明　裕也 さん
（情報理工学部１回生）



留学に興味をもったのは入学してからです。入学前は留学をしたいと思ったこともありませんでした。しかし、大学のグローバル化への取り組みを目の当たりにしたことで私の考えは一変し、「自分も留学してみたい」と考えるようになりました。

海外渡航をしたことがなく、ましてや留学について考えたこともなかったので、留学に対して、あまりにも知識が乏しい状態でした。知りうる範囲のガイダンスに出席し、調べていく中で留学する目的も変わっていきました。最初はただ漠然と海外に出ることに興味が湧いていただけでしたが、あるガイダンスをきっかけに留学する目的が「新たな視点を得る」ことに変わりました。しかし、多くの留学プログラムは最低でも数週間の留学で、海外での経験が0の私にとっては高いハードルでした。

そのような中、このGlobal Fieldwork Projectを見つけました。研修期間が5日間と初心者にとっても無理のない期間で、教員の引率やバディ制度もある。さらに語学要件はなく、事前事後講習もあり、費用も少なく奨学金もでる。私にはうってつけのプログラムでした。

様々な方の支援によって実現しているこのプログラムは、希望者がとても多かったと聞いています。幸運にも手にすることのできたこの機会。Global Fieldwork Projectでの経験が世界へと目を向ける第一歩となるよう、“まずはやってみる”ことを大切に取り組んできたいと思います。

＋R個人奨励奨学金 受給者インタビュー

河田　麻実 さん
（国際関係研究科１回生）

勉強だけで4年間も好奇心がもたない。もっと自分の人生面白くしたい、これまでの私では考えられないことしたい。漠然とした衝動に駆られはじめた19歳の夏、「＋R個人奨励奨学金」に出会いました。

「地方に国際交流の機会を増やす」と「子どもの教育支援」を自分のテーマに据え、得意な英語を活かし、英語合宿の運営支援や、地域活性化事業への参入、海外訪問団の通訳アテンドなどの活動をしました。奨励金はこれらの交通・宿泊費、書籍代などにあてました。

20歳の時、長期的な活動を見据えNPO法人を立ち上げました。しかし、想像以上に困難で、不甲斐なさを痛感していたとき、活動報告として取材を受けました。そのとき事務局の方がおっしゃいました。「失敗も不甲斐ない思いも、いい経験をしたね。」この経験は、最初の一歩を踏み出すことなしには得られなかったものだと気が付きました。そこからは自分の出来ることを考え、広報に力を入れるようになりました。

卒業して、今、心から思うことがあります。「立命館でよかった」。学費と生活費を貸与型奨学金で賄っていたので、「＋R個人奨励奨学金」がなかったら何も始めていなかったと思います。23才になった今、大学院の国際関係研究科でメディア・国際ジャーナリズムを研究しています。秋からオランダ・エラスムス大学に留学し、開発学も学びます。将来は国際機関の広報部門で仕事ができるようになれたらと思っています。まだまだ、私の挑戦はこれからです。

※＋R個人奨励奨学金は2017年から＋R校友会未来人財育成奨学金に生まれ変わりました。

特製 立命館バッジ プレゼント

累計２万円以上「立命館大学校友会未来人財育成基金」にご寄付くださった方々に感謝の気持ちを込めて、特製立命館バッジをプレゼントしています。

「RITSUMEIKAN」と「Beyond Borders」の文字を配し、スクールカラーを用いたデザインで作製いたしました。
「立命館大学校友会未来人財育成基金」への支援の広がりと共に、特製立命館バッジを付けて
校友大会に参加される方々が増えています。

ランキングで見る立命館の研究力・教育力

民間企業からの受託研究実施件数２年連続全国１位

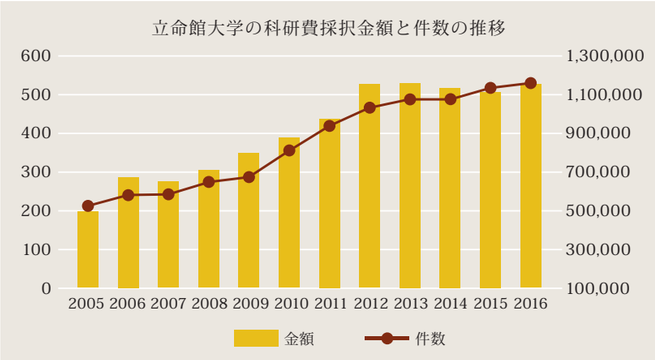
文部科学省は、「平成27年度　大学等における産学連携等実施状況について」を発表し、「民間企業からの受託研究実施件数」において、立命館大学は2年連続全国1位（件数287件）となり、平成22年度から平成27年度において研究費受入額の平均伸び率が大きい機関としても1位（約14.9％増）となりました。

私立大学はリソース（研究者数、研究スペース、研究施設設備など）で国立大学に劣るなか、個別の企業ニーズを積極的につかみ、とりわけ本大学は2005年に全国大学初の産学連携窓口であるリエゾンオフィスを設置し、受託研究を主として取り組み、京都府、滋賀県、大阪府を中心とした地元企業との連携を重視し、その成果を積み重ねてきたことが今回の結果につながりました。

1位	立命館大学	287件
2位	近畿大学	275件
3位	慶應義塾大学	196件
4位	日本大学	169件
5位	早稲田大学	155件
6位	拓殖大学	131件
7位	東京女子医科大学	126件
8位	東京都市大学	123件
9位	大阪大学	117件
10位	九州大学	108件

科学研究費補助金（科研費）で４年連続の採択金額「私立大学３位」、採択件数「私立大学４位」を獲得

立命館大学は、2016年10月13日に文部科学省が発表した「平成28年度科学研究費補助金（科研費）の配分」において、採択金額ランキングで慶應義塾大学、早稲田大学に次ぐ私立大学3位（西日本私立大学1位）、採択件数ランキングでは私立大学4位（西日本私立大学1位）となりました。採択金額は11億6207万円、採択件数は527件で本学過去最高の採択件数です。2005年からの11年間で本学の採択金額は約2.3倍、採択件数は約2.5倍に伸びています。今年度は採択件数の若手比率（39歳以下の研究者が採択となった件数の割合）が30.4％と、若手研究者の採択が目立った結果となっています。



「THE世界大学ランキング 日本版2017」、立命館大学が22位・立命館アジア太平洋大学（APU）が24位

2017年3月30日、ベネッセグループ協力のもと、イギリスの高等教育専門誌『タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（Times Higher Education、THE）』を有するTES Globalが、「THE世界大学ランキング日本版2017」を発表しました。世界版ランキングは「研究力」を軸に据え、日本版ランキングは、学生の学びの質や成長性に焦点をあて、大学の「教育力」を測る設計となっています。指標は「教育リソース（Resources）」「教育満足度（Engagement）」「教育成果（Outcomes）」「国際性（Environment）」の4分野11項目で構成されています。今回、総合順位で、立命館大学が22位・立命館アジア太平洋大学（APU）が24位、評価指標の「国際性」の分野では、APUが1位となりました。

学生の活躍

弓道部男子（2016.8.9−11）
全日本学生弓道選手権大会
男子団体6年ぶり3回目の優勝

将棋研究会（2016.12.25−27）
「第47回学生王座戦」優勝

女子陸上競技部（2016.12.30）
2016富士山女子駅伝
4連覇達成

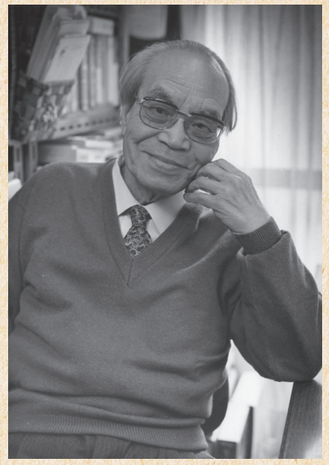
硬式野球部（2017.5.5）
東克樹投手が2度目の
ノーヒットノーラン達成

写真提供／月刊陸上競技

RESEARCHERS

3500年の時を超えて、漢字の世界に新たな解釈

白川静が生涯をかけて解き明かしたもの



私たちにとって余りにも身近な文字である「漢字」。しかし、その習得の過程では、苦労された方も少なくないでしょう。ひたすらノートに文字を書き続ける、何故そう書くのかを考えずに丸暗記、果ては忘れ物をした罰として漢字の書き取りを課せられるなど、負の記憶と共に漢字が存在しているという方もいらっしゃるかも知れません。

しかし、漢字は人々を困らせるためにできた「悪魔の文字」ではありません。誰もが共有する感情や営み、その結晶である文化そのものなのです。漢字の起源の研究を通じ、東アジアに生きる私たちの考え方を明らかにする、そのようなテーマに生涯をかけて取り組んだのが、白川静（しらかわしずか 1910-2006）立命館大学名誉教授です。白川先生は、漢字の最も古い姿である甲骨文（3300-3500年前の亀甲や獣骨に刻まれた文字）や金文（約3000年前の青銅器に鋳込まれた文字）などの研究を通じ、漢字の成り立ちには宗教的・呪術的なものが深く影響していることを解き明かしました。あわせて、西暦100年に許慎（きょしん）によって著された最古の漢字字典であり、これまで中国で「聖典」とされてきた『説文解字（せつもんかいじ）』の誤りを指摘、白川先生の漢字研究は、現在「白川学」「白川文字学」と呼ばれています。

平井嘉一郎記念図書館にある白川静文庫

古代人の思想、東洋の心を探る

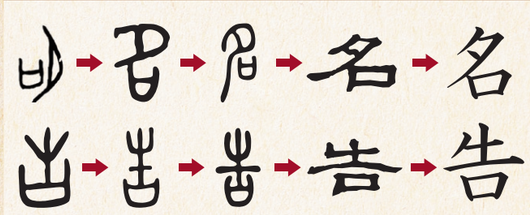
「名」や「告」の例を挙げて、「白川文字学（白川説）」の世界の入口にご案内したいと思います。先に紹介しました中国の『説文解字』では、「夕と口からなる名という漢字は、夕方になると暗くなり相手が見えないので、口で名前を言った」ことが所以であり、また「告は、牛と口からなり、牛は人を突くので角に横木を渡してそれで告げ知らせた」ことからできたと説明していました。

白川先生が生まれる10年ほど前に甲骨文が中国・安陽で発見され、白川先生の青年期は文字学が新進の学問として脚光を浴びている時代でしたが、『説文解字』の解説を読んだ白川先生は疑問を抱きます。そして、新しい研究成果の一つである呉大澂（ごたいちょう）の『字説』の考え方にヒントを得て、甲骨文・金文のそれぞれの漢字を構成する共通の部分に着目します。そして現代の漢字で「口」がついている字は数多くあるが、そのほとんどは「（顔にある）くち」を示したものではなく、「神への祈りの言葉を収めた器」ではないかと考えました。白川先生はこれを「サイ」と名付けますが、この「サイ」の発見により、白川文字学は大きな発展を迎えます。

その考え方を適用すると、「名」の「夕」は、三日月を表す「夕方」の意味ではなく、肉を表す「にくづき」の省略形であり、祈りの言葉を収めたサイと供え物の肉の形であり、子どもの成長を祈って名をつける儀式のことを指すと説きました。新生児の死亡率が現代よりもはるかに高かったこの時代、出生から一定期間が過ぎて養育の見込みがたってから名づけを行うことが慣習でした。日本にも「お七夜」という風習があったことからもそれがうかがえます。

また、「告」の上の部分は甲骨文では「牛」の形ではありません。白川先生はこれを「木の枝と見て、それにサイをつけて神に告げ祈ること」と解きました。日本の神道にも「榊（さかき）」の存在があります。白川文字学の特徴は、基本の字の組み合わせにより文字の世界がどんどんつながっていくことです。「サイ」は枝や旗にとりつけることにより「史・吏・使・事」などの漢字を生みました。「夕」はもとの形である「胃・腸」などに含まれる「にくづき」や「祭（祭壇に供え物の肉を手で載せている様子）」とつながるのはもちろん、「多（肉を重ねているさま）」や「移（穀物や肉を供えて悪霊を他へ『うつす』儀式）」へと展開していきます。このように、白川先生は漢字の起源は日々の暮らしだけではなく、神事や政治に関わりがあり、漢字の形成を通して古代人の思想が浮き彫りになると解いたのです。

「名」「告」の書体の移り変わりの例



白川先生は、漢字・漢文を仲立ちにして育まれてきた東洋にあこがれ、後に文化的つながりが稀薄になり、また政治的対立の深まるようになった東洋の現状に心を痛め、漢字・漢文の研究を通して東洋の心を探り続けました。漢字・漢文は東アジア地域の人々をつなぎ、また古代人と現代人との心をつなぐものです。3500年の間、変わらぬ意味づけで使われてきた漢字。その意味付けに新たな解釈を持ち込んだ「白川文字学」は、文学や文字学にとどまらず、思想・芸術・教育はじめ様々な分野から注目を浴びています。

文：立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所文化事業担当　久保裕之（立命館大学専任職員）